



CHIBA
UNIVERSITY

ちばだい

プレス

千葉大学広報誌



特集

CAMPUS LIFE 2018

千葉大生のキャンパスライフを紹介

千葉大学OBOGインタビュー

オリンパス株式会社 後野和弘さん

研究室訪問

ちばだいグローバルLETTERS

44
vol.
2018 JULY

千葉大学に入学して、どんな経験をしてきましたか。
 そしてどんな人間になっていきたいですか。
 キャンパスライフは十人十色。千葉大学でそれぞれの
 道を歩む4人の学生の素顔に、スポットを当ててみました。

千葉大学だからこそ
 学べる分野に惹かれて

自分の進路に悩んでいた高校生のときに、建築とはまた異なるデザイン分野であるランドスケープのデザインに興味を持ちました。千葉大学を選んだのは、国公立の大学の中で唯一園芸学部があり、専攻次第ではランドスケープに特化した授業を受けられるからです。学んでいくうちに「まち」に興味を持ち、将来的にはまちづくりに携わるお仕事ができるのではないかと考えています。大学に入って驚いたのは、思い立ったらすぐ行動できるように

り、自分の活動の幅がとて広がったことです。また、今となっては見慣れてしまいましたが、松戸キャンパス内をお散歩していると、いろんな虫や動物が見つけれられて楽しいです！

出身地の縁がきっかけで
 始まった研究活動

たまたま私が函館市出身であることから秋田先生に声をかけていただき、函館市に関する研究をすることに。当時あった「理数大好き学生の発掘・応援プロジェクト」という制度で2年生から早めに研究室に所属し、素敵な先輩たちに恵まれなが

らいろいろな体験や視察ができました。ちょうど研究を始めてから1年経過するかないかの時期に日本造園学会関東支部大会で発表する機会を得て、最優秀研究発表賞を受賞できました。

これからはいろいろなところに足を運んで自分の眼でいろいろな街を見たいです。研究室とISO委員会が一緒にやっている被災地ボランティアにも積極的に参加したいし、いま勉強中の地理情報システム(GIS)もばっちり使いこなせるようになりたい。まだまだやりたいことがたくさんあります！

ランドスケープへの 興味から「まち」の研究へ

松村 葵 (まつむら・あおい) さん
 園芸学部 緑地環境学科 3年
 私立遺愛女子高等学校 出身

Snap! in Campus

2年生までですが茶道部に入っていました。週に1回のペースで自分が点てたお茶と美味しいお菓子を食べながら茶道のお点前を勉強しています。今でも部員との交流は途絶えることなく、茶道部のイベントに参加しています。とてもアットホームな空間で楽しいです！



撮影：松戸キャンパス フランス式庭園

未知の武道に出会い 全国クラスで活躍する 部の主将に

大島 悠太郎 (おおしま・ゆうたろう) さん
 法政経学部 法政経学科 法学コース 4年
 千葉県立船橋高等学校 出身



撮影：西千葉キャンパス 陸上競技場

剣道の世界へ足を踏み入れる

剣道を始めたのは大学1年生のときです。掲示板で見た読めない武道の存在に興味を持ち、体験稽古に参加してみたのがきっかけでした。現役の世界チャンピオンである監督の中野哲爾先生の動きを見て、人間にはこんな動きができるのか、私もやってみよう！と一目惚れしてしまったり、世界チャンピオンに教わる機会は今しかないと思ったりすることが決まらず、入部を決めました。

昨年の全日本大会では怪我で出場できなかった先輩に代わり出場。先輩の無念を晴らさなければと普段以上の練習を積み重ね、通常6カ月ほどかけて完成させる技の

組み合わせを3週間で完成させ、3位に受賞することができました。

大学生活で大切なのは
 何かを得たと言えるか

卒業後は経営コンサルタント職に就く予定です。多くの経営の意思決定の手助けを行う中で、自分のビジネスへの感覚を養い、いずれは自分で事業を起こして、社会に貢献することができればと思います。

大学生生活の価値は、入学難易度でも大

学ブランドでも決められはしません。自分の意思で、一生ものの友人や専門的な知識と

いった何かを得るために時間を投資し、終わった時に自分はこれを手に入れることができたと確信を持って言えることで、価値が決まると思います。これから千葉大学入学を目指す受験生の方は、大学生活の中で自分は何かを得たいのだろうかとか常に問いかけ、明確にし、それを得るために努力をしている輝かしい大学生生活を夢見て、頑張ってください！

Snap! in Campus

千葉大学剣道部は、監督による論理的な指導と、みんなで、楽しく、規則正しく、夢と、信念と、目標を持って、部活動を行おうという「6つのモチベーション」を大切にしていることが強さの肝。毎年、全国・世界大会のレベルで活躍しています。写真は世界大会でオーストリアチームと。



研究、手話、サッカー あらゆることに出会った 学生生活

良知 壮太郎 (らち・そうたろう) さん
工学部 メディカルシステム工学科
(現・工学部総合工学科医工学コース)4年
静岡県立藤枝東高等学校 出身

様々な授業が選べるのが
大学の良いところ

補聴器を自分が使っていることもあって福祉機器や医療機器に興味があり、工学部の専攻へ。今は難聴の特性について研究しています。大学に入学したころは、多種多様なサークルやコミュニティがあることで、選べる授業の多さに驚きました。1年生の時に受講した心理学の授業で「トマン」という概念を学んだことがとても印象に残っています。日常生活においては役に立たないけれども、なんだか芸術っぽい、というのが面白いです。

手話、そして
デフサッカーとの出会い

高校生の時までは手話が使えなかったのですが、手話サークルのウルトラマンの会には面白い先輩や障害に理解のある先輩がたくさんいて、楽しく手話を身に覚えられると感じて入会しました。手話は単語を覚えると表現が豊かになるので、文字通り「目に見えて」

こういう役に立つだけではないことを学べるのも大学生の特権ですね。4年生になった最近はずっと研究室で過ごしています。静かできれいな空間なのでとても快適です。

上達することや、語源や動作について考えるのが楽しいです。

小学生からサッカーを続けており、大学に入ってデフサッカーを知り、始めてみたところ、耳の聞こえない人たちと手話でコミュニケーションをとりながらサッカーをするのがとても新鮮で楽しかったので、再びサッカーに熱中するようになりました。埼玉のチーム「SDU(Saitama deaf football club)」に所属させていただきながら、代表候補合宿にも参加して、光栄なことに日本代表に選ばれることができました。

Snap! in Campus

デフサッカー男子日本代表は、5月に行われた第4回アジア太平洋ろう者サッカー選手権で準優勝！2020年に行われるデフワールドカップへの出場権を獲得することができました。



撮影：西千葉キャンパス 工学系総合研究棟2

人と関わる経験を通し、 人生に寄り添える医師をめざす

上條 恵莉子 (かみじょう・えりこ) さん
医学部 医学科 4年
私立桜蔭高等学校 出身

手や体を動かす授業が新鮮！

まだ知られていないことの多い人間の体の可能性を解明したい気持ちと、心と体を同時にサポートすることができる医師という職業に魅力を感じ、医学部へ進みました。大学の授業はシミュレータを利用しての研修や模擬患者さんなどの医療面接など、座学のイメージが強かった高校の時とは大きく違い印象的でした。本当の人間にそっくりの機械を使用しての授業はとても新鮮で楽しいです。授業後は医・薬・看護の3学部が合同で練習する玄鼻バドミントン部や、「世界の医療を考える会」という留学生と交流するサークルも楽しんでいます。

やりたいと思ったことは何でも挑戦できる環境
高校生の時には全く想像できなかったほど、大学では様々な活動に関わることができ、思い描いていた大学生活の何倍も何十倍も充実している楽しいです！昨年は玄鼻キャンパスの大学祭「玄鼻祭」の開催が危ぶまれていたなか、実行委員長を引き受けることに。学年・学部を超えた多くの仲間と同じ目標を目指し、走るこ

ができたのはとても貴重であり、幸せな時間でした。
医師と一言で言っても、キャリアは様々なということや、大学に入り実感しています。そのため今は特定の分野にとらわれず、卒業生のお話を伺ったり、講演会に参加したりして、自分の将来について考えています。人と話したり、関わるのがとても好きなので、それを活かして患者さんが歩まれてきた人生やこれから歩みたい人生に寄り添うことができる医師を目指して頑張っていきたいです。

Snap! in Campus

千葉大学を卒業された方々や地域の方々、玄鼻祭がなくなるかもしれないと、寂しく感じているのを目の当たりにしたことも実行委員長になったきっかけ。あきらめる前に行動することで状況を変えていけると実感でき、これからの自分を後押ししてくれる貴重な体験になりました。



撮影：玄鼻キャンパス 医学部本棟 04



後野 和弘 (この・かずひろ)

1971年、大阪府生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒業、1992年に千葉大学大学院工学研究科で画像工学を修了し、オリンパスに入社。内視鏡の開発研究業務を経て現職。工学博士。2017年、「NBI(狭帯域光観察)内視鏡システム」の開発により紫綬褒章を受章。



千葉大学の恩師、同窓生による紫綬褒章祝賀会(2017年6月10日)

NBI(狭帯域光観察)による内視鏡システムで紫綬褒章を受章したオリンパス株式会社の後野和弘さん。画期的な手法の開発ストーリーや千葉大学の思い出などを語っていただきました。

優れた医療機器の開発を通し、 医師を支援し、より多くの命を救う

オリンパス株式会社 イノベーション推進室
チーフフェロー イノベーションマネージャー

後野 和弘 さん

千葉大学での出会いと学びが
きっかけで内視鏡研究の道へ

内視鏡の開発に携わるようになった経緯を教えてください。
後野 私は高校時代にSF映画が好きで、特に特殊撮影に興味がありました。大学進学を考えたとき、どうせならそういう方面の勉強をしたいと考え、いろいろと探してたどり着いたのが千葉大学の画像工学科でした。そして、そこで出会ったのが、当時は黎明期だったデジタル画像処理を最先端で研究されていた工学部の三宅洋一教授です。三宅先生の影響で画像処理に興味を持ったことがきっかけで、大学4年次に千葉大学とオリンパスの産学連携プロジェクトに参加する機会に恵まれ、そのときに共同研究したのが内視鏡でした。そのままオリンパスに入社して、今回「NBI(狭帯域光観察内視鏡システム)」の開発に成功できたので、千葉大学で学んだことは、まさに私の原点だと思っています。

光学技術にこだわった内視鏡で
がんの早期発見・早期治療に貢献

「NBI内視鏡システム」とはどのようなものでしょうか。
後野 内視鏡検査をする際に、体内の粘膜の状態や毛細血管を見やすくして、がんなどの診断や治療に役立てようというものです。早期のがんは粘膜の表層部分で発生するので、その部分の様子を正確に観察することができれば、早期発見・早期治療につながるわけです。NBIを使った内視鏡の優れている点は、通常の内視鏡よりも粘膜表面の様子が見えやすく、検査の効率化や確度の向上に寄与できる点です。

具体的にはどのような技術が使われているのでしょうか。
後野 人間の皮膚や粘膜は光を透過することが知られています。光はRGB、つまり赤色、緑色、青色の3原色からできていますが、この3色はそれぞれ波長が違い、粘膜に入っていく深さに差が出るので、当てる光の色を操ることによって粘膜表面をより見やすくすることが可能です。赤色は深く入りすぎるので使わず、少ししか入らない青色で表層部分の毛細血管、青色よりも深く入る緑色で粘膜内部の太い血管を表示させます。デジタル加工ではなく、光学的に見えるように光を当てるので、従来の内視鏡に比べてはるかに安定的に見ることが出来ます。

医療機器開発に携わるやりがい
多くの患者さんを救える可能性があること

どのようにしてNBIという発想にたどり着かれたのでしょうか。
後野 私はオリンパス入社時から内視鏡の画像処理のための研究に携わっていました。最初は、モニター上で見える画像と、それを撮影したときの色にズレが出ないようなソフトウェアの開発、次に内視鏡検査中にある組織の光学特性を測定できるような医療機器の開発を担当しました。様々な研究を進めるなかで、光の当て方でもっときれいな画像を得ることができないかというNBIの最初のアイデアが生まれました。

実際に商品化するまでの苦労は？
後野 RGBの中の青色と緑色を使えばうまくいくのではないかとという着想はあったものの、実際に使えるかどうかを確認するには膨大な実験が必要です。特に大変だったのは、赤色をカットするための光学フィルターの開発でしたが、オリンパスが持つ光学技術のおかげで解決することができました。

医療機器を開発することのやりがいはいかなる点にあるのでしょうか。
後野 どんなに優秀な医師でも救える人数には限りがありますよね。年間百人だとしても20年で二千人、30年でも三千人。一方、世界中で使われる医療機器を開発できたら、何億人単位の命を救えるかもしれません。私はそこにやりがいを感じています。

では、最後に千葉大生へのメッセージをお願いします。
後野 私が社会に出たときに感じたのは、自分を主張することの重要性です。仕事は、誰かがお膳立てしてくれるケースはほとんどなく、自分がやりたいことをやるには、自ら道を切り拓かないといけません。私は千葉大学時代にアルバイトを経験したことが人と話すための基礎体力になりました。皆さんも、ゼミの発表でもサークル活動でもいいので、たくさんの人とコミュニケーションをとり、自分をアピールするプレゼンテーション能力を磨いておくと、社会に出たときに役立ちます。

超高齢社会を迎えて、今後ますます増加していくことが予想される病原性真菌の感染症。画期的な研究で感染症治療に挑む知花博治准教授に話を伺いました。



知花博治(ちばな ひろじ)
千葉大学真菌医学研究センター准教授。名古屋大学医学研究科博士課程を修了後、米国ミシシッピ州立大学研究員を経て、2001年に千葉大学に着任。2018年夏に創業を目的とするベンチャー企業を設立予定。

先生の研究について
教えてください

私が研究している「真菌」とは、一般に酵母やキノコ、カビと呼ばれている生物です。酒、味噌、パンなどは真菌を利用してつくりますので、とても身近で大切な存在なのですが、一方で感染性のある「病原性真菌」もいて、特に高齢や病後により免疫力の落ちた人にとっては、感染すると死に至る恐れもあります。現状、真菌の感染症の治療薬は、耐性菌の出現も増えていて、新しい抗真菌薬の開発が必要ですが、ところが、真菌は我々人と同じ真核生物なので、真菌に効果のある薬剤の多く

は人にも作用してしまいます。そのために副作用の低い抗真菌薬の開発がとても難しく、製薬企業も開発を断念してしまうことが多いのです。私の研究では、感染メカニズム解明と副作用の低い安全な抗真菌治療薬の開発をめざしています。

病原性真菌の感染症が起る仕組みを
どのように探るのですか？

病原性真菌の感染症は様々ですが、私が研究しているのは、近年、耐性菌の増加で問題になっている「カンジダ症」です。カンジダ菌は、人間の体内に常在していて、特に問題はないのですが、免疫力が落ちると感染しま

す。カンジダ菌には五千あまりの遺伝子がありますが、全遺伝子の「組換え体」を15年かけて作成しました。病原性真菌の全遺伝子の組換え体が完成したのは、世界で初めてです。その組換え体セットを使い、どの遺伝子が人体内のどの場所でのように作用するのかを探っていきます。

現在は創業ベンチャー設立に向けて
準備中と聞きました

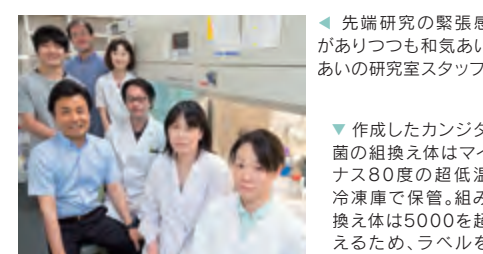
組換え体セットを使って真菌の急所を見つけて出す「薬剤標的分子迅速同定法」という手法を開発し、現在特許出願中です。いよいよ今後は創業段階に進むということ、ベ

次世代型抗真菌薬の開発をめざして

ベンチャー設立の準備をしているところです。千葉大学の現職教員が単独でベンチャーを立ち上げるのは初めてのことだそうですが、大学からの承認も受けることができました。次の15年で、抗真菌薬という形で研究成果を社会に還元したいと考えています。

最後に千葉大生への
メッセージをお願いします

まず夢を持ち、その夢に向けて挑戦し、そして実現のために壁を乗り越えることが大切。私自身、カンジダ菌の生命現象のすべてを解き明かしてみたいという夢があったから、ここまで頑張ってきたことができた。もちろん平坦な道ではありませんでしたが、これからも大きな壁にぶち当たることがあると思いますが、乗り越える自信があります。特に若いときは、ゴールに到達するよりも、低い壁でも良いので乗り越える力を養うことが重要です。私達の研究室では共に壁を乗り越えてくれる方、研究を通して夢を実現する力をつけたい学生を歓迎します。



▲ 先端研究の緊張感がありつつも和気あいあいの研究室スタッフ

▼ 作成したカンジダ菌の組換え体はマイナス80度の超低温冷凍庫で保管。組み換え体は5000を超えるため、ラベルを作成するなどして厳格に管理している



CHIBADAI GLOBAL LETTERS
ちばだい
グローバル
LETTERS
vol.04

海外を自分の目で見て、
英語でコミュニケーション
がしたい！

この研修に参加する上での目標は大きく分けて2つあります。まず1つ目に、タイの文化、人々、生活に触れることです。所属する学科の授業で海外の食品市場が紹介されたことから、タイの水上マーケットを実際に自分の目で見て、理解を深めたいと思いました。2つ目に英語でのコミュニケーションを実践することです。日本で勉強はしていても、活かせる機会が圧倒的に少ないと感じていたため、会話やプレゼンテーションの授業があることが魅力的でした。

気づきと驚きが
たくさんある滞在に

滞りしたM.U.C.(マヒドン大学インターナショナルキャンパス)は授業が全て英語。TA(※)の学生も皆とても英語が流暢で、日常

今回のレポーター



園芸学部・食料資源経済学科 3年
ふじしろ あずみ
藤代 杏澄さん

参加した留学プログラム

グローバル・
フィールド・ワーク
(BOOT)

行き先 ▶ マヒドン大学(タイ)
期間 ▶ 2017.9.10~9.24

留学プログラム紹介

グローバル・フィールド・ワーク
(BOOT)

アジアのトップ大学を派遣先として、コミュニケーションベースの英語学習および現地文化の学習・体験を行う2週間程度のプログラムです。海外ビギナーズ向けの留学プログラムとして、海外渡航の心構え、準備、体調管理や危機管理までの充実したフォローも特徴です。今回紹介した派遣先、タイのマヒドン大学には、「千葉大学バンコク・キャンパス」が置かれ、海外留学先の拠点としての活用が期待されています。

詳細はこちら！
<https://skipwise.chiba-u.jp/>



会話で自分の語彙力や、文を構成する力の不足に改めて気づきました。しかし、このように英語を使う機会がなければ実感することもできなかったため、今後もお世話になったタイの学生と連絡を取り続け、常に英語に触れることを大事にしたい、そして、何なく自由なくコミュニケーションが取れるようになりたいとより強く思うようになりました。

タイでの生活で驚いたのは、交通ルールです。例えばレストランに行くだけでも、TAの説明なしには安全に外出できなかったでしょう。また、味の想像がつかない食事メニューもあり、TAに詳しく教えてもらって注文しました。日本人が辛いと思うものもタイ人は少しも辛さを感じていない等、感覚の違いを知るのも新しい発見となりました。

広がる留学の選択肢

今後は、ロシアのサハリンなどで植物工場の見学や、インドのタ



▲ アユタヤ遺跡へ。TAに案内してもらい、たくさん写真を撮りました



▲ 仲良くなったTAが、自由行動の際に、ココナツ工場のTropicanaという場所に連れていかれました。タイ語で書いてある商品の説明を英語で教えてもらい、買い物を楽しみました



▶ お別れパーティーでのスピーチを引き受けた私は感謝の気持ちを皆さんに伝えました

GRAMや制度をぜひ活用して、充実したキャンパスライフを目指してください！
※TA:ティーチングアシスタント。タイのBOOTプログラムではマヒドン大学の学生がアシスタントとして英語の授業はもちろん、学外活動などもサポートし、交流を深める。

最高の「S」評価 ツインクルと高大連携

INFORMATION



ツイン型学生派遣プログラム

平成30年3月の文部科学省採択事業の評価において、教員養成系学生と理系学生がチームになりASEANの小・中・高等学校で授業を行うツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）、ならびに大学・高校・教育委員会がコンソーシアムを構築し、高校生に早期から高度な科学体験・教育を提供する「高大連携での科学教育コンソーシアムによる「次世代才能スキップアップ」プログラム」の2件が、最高評価の「S」評価を受けました。

学生の育てた鉢花を販売

INFORMATION



販売会当日の様子

2018年5月12日、環境健康フィールド科学センター花弁・苗生産部で生産されたベチニアやカリブラコアの鉢花を「母の日ギフト」として販売する直売会を、つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅構内で行いました。これらは園芸学部生への実習教育を通じた生産されたもので、昨年の12月より準備を始めたものです。お客様の購入後を念頭におき、育てやすく、長持ちする品目を販売しました。

「飛び入学」20周年！記念シンポジウムを開催

EVENT



「私達は、地球の2/3を、まだ知らない。」卒業生の大木さんは未知の海底をロボットで探る自らの研究テーマについて講演を行いました



第2部の公開パネルディスカッションでは、先進科学プログラムは今とこれからのについて活発な意見交換がなされました

17歳から大学で学ぶ「飛び入学」のプログラム開始20周年を迎えるにあたり、2018年6月8日（金）に「千葉大学先進科学センター創立20周年記念シンポジウム」を開催しました。日本で唯一の飛び入学専門推進機関である同センターは、1998年に現在の学制で日本初の飛び入学を受け入れて以来、これまでに71名の卒業生を輩出しています。本シンポジウムでは、早期教育・才能教育に造詣が深い岩永雅也氏（放送大学副学長）、第3代先進科学センター長の金子克美氏（信州大学特別特任教授）、飛び入学第7期生の大木健氏（海洋研究開発機構技術研究員）を招き、世界の早期教育の動向、科学の奥深さ、千葉大学の飛び入学卒業後の研究活動についての講演を行いました。また第2部では、飛び入学開始から20年間の成果と今後の方向性について討論されました。

千葉大学生とチバテレの コラボアイスcreamを発売

INFORMATION



パッケージデザインも学生自身で手がけました

千葉大学COC+の取り組みの一環として学生が商品開発した「千葉大アイス」が、2018年3月より数量限定で発売されました。本企画は千葉大学生とチバテレ、ナミキアイス工房がコラボレーション。味の種類は千葉大学のハチミツ、千葉県産のソウルフードと言われる味噌、ピーナッツなど、地産のものを使うことにごこだわっています。販路開拓も学生が手がけ、県内の道の駅や千葉大学生協等で店頭並びました。

文部科学大臣表彰を受賞

AWARD



受賞者による学長への報告および懇談が行われました

平成30年度科学技術分野の文部科学大臣表彰において、大学院工学研究院橋本研也教授が科学技術賞研究部門を、大学院理学研究院山田泰裕教授が若手科学者賞をそれぞれ受賞しました。科学技術賞研究部門は、我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究および発明を対象とし、若手科学者賞は、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた40歳未満の若手研究者を対象としています。

本学学生が NHK学生ロボコン出場

INFORMATION



CRSの活動

千葉大学公認サークルの「Citra Robot Studio (CRS)」が、2018年6月10日に開催されたNHK学生ロボコン本戦へ出場しました。今年度のルールは布で装飾を施したシャトルを投げ飛ばして点数を競うもので、ベスト8入賞は逃したものの、エアアシロンダーを活かした力強いスロイニングを特徴とするマシンで健闘しました。同サークルが本戦へ出場するのは4度目で、2016年から3年連続での出場です。

治療学人工知能(AI)研究センターが設置されました

INFORMATION



2018年5月には看板掲げ式が行われました

2018年4月1日、医学研究院附属治療学人工知能(AI)研究センターが設置されました。本センターは、基礎医学研究ビッグデータと医療ビッグデータを基盤に人工知能(AI)を構築し、実証研究及び臨床現場での利用を展開。そして新しい学問領域として「AI治療学」を創成し、革新的な基礎研究の推進、速やかな精度の高い診断法の確立、新たな治療法の開発、「AI治療学」を牽引する人材育成等を行ってまいります。

留学生が もたらした小玉スイカ

もっと知りたい千葉大学



実はおよそ1.5kg。橙黄色の果肉が特徴です

園芸学部の前身「千葉高等園芸学校」初の留学生は、1916年に入学した藤嘉祥でした。彼が中国から持ってきたスイカの試作に、橋本章司教授が成功し、後の小玉スイカの育種として大きな役割を果たしました。橋本教授が「嘉宝」と命名したこのスイカは、現在でも手軽に入手でき、人気があります。その由来こそ忘れられていますが、「嘉宝」の名付けが師弟関係の深さを今に伝えています。（国際教養学部 見城 悦治）

学生が環境へ深く取り組む 大学として国際的な賞を受賞

AWARD



マルセイユで行われた授賞式に参加した上田さん(左)と岡さん(右)

千葉大学は、2018年5月16日、大学の優れた持続可能性の取り組みを表彰する「国際グリーン・ガウン賞2017-2018」で、世界で最も深く学生が環境への取り組みを行う大学として「学生関与部門」を受賞しました。15年にわたり学生主体でISO取得を通じた環境マネジメントシステムの運用を行ってきたことや、学生による環境活動が教育につながっている独自の仕組みなどが、世界の教育機関に導入できるものであると高く評価されました。

千葉大学の“歴史”と“先端”が書籍に 『留学生は近代日本で何を学んだのか』 『バイオベンチャーの冒険者たち』

INFORMATION



バイオベンチャーの冒険者たち

千葉大学ベンチャービジネスラボラトリーは、書籍「バイオベンチャーの冒険者たち 千葉大発！世界をアップデートする6人のバイオ研究者」を幻冬舎より出版しました。本ラボラトリーの研究プロジェクトの中でも、とりわけ社会実装に向け熱心に取り組んでいる6名のバイオ系の研究者が執筆にあたり、大学で行われているバイオ研究の最前線や、大学教員と学生の日々の努力が実を結んでいく過程が語られています。



留学生は近代日本で何を学んだのか

「もっと知りたい千葉大学」コーナーを担当している国際教養学部見城悦治教授による著作「留学生は近代日本で何を学んだのか」医療・園芸・デザイン・師範が、日本経済評論社より出版されました。千葉大学の前身にあたる戦前期の諸学校を事例として、各々の専門分野における留学生たちの修学状況、帰国後の活躍を通じ、近代日本と東アジアの関係史を多くの事例とともに明らかにしていきます。



I N D E X

- 02 特集 CAMPUS LIFE 2018
なぜ千葉大学に入り、そしてどこに向かうかは人それぞれ。
在学生4人のキャンパスライフを紹介
- 06 特集 千葉大学 OBOGインタビュー
画期的な内視鏡システムの開発により
昨年、紫綬褒章を受章したOBが登場
- 08 研究室訪問
次世代の抗真菌薬の開発をめざし挑戦を続ける
—千葉大学 真菌医学研究センター
病原機能分野 カンジダフェノームプロジェクト—
- 09 ちばだいグローバルLETTERS
千葉大学の海外留学の拠点として期待される
タイからのレターが届きました
- 10 TOPICS / もっと知りたい千葉大学

[表紙] 細梅 靖晶 (ほそうめ・やすてる) さん

学務部学生支援課職員
千葉大学教育学部
大学院教育学研究科 OB



現在、学生支援プラザの窓口などで学生の活動をサポートしている職員の細梅さん。千葉大学の卒業生で、学生時代は男子ラクロス部に所属していました。在学中の2015年、男子ラクロスの22歳以下日本代表に。2017年には社会人も含めた日本フル代表としてオーストラリアで行われた国際大会に出場を果たし、強豪国を制して優勝を飾りました。現在でも、朝練のある日はラクロス部の後輩たちの練習をコーチしてから職場に向かいます。職員として、そして卒業生として、日々千葉大生を支援しています。

(撮影:西千葉キャンパス サッカー・ラグビー場)

ちばだいプレス

編集・発行/千葉大学 企画総務部渉外企画課広報室
〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1番33号
TEL: 043-251-1111(代表) E-mail: koho-hp@office.chiba-u.jp
ご意見・ご感想をお寄せください